

本研究では、中国都市部における定年退職の世帯内波及効果を実証的に検証するため、中国全土の中高年者を対象とした代表的な縦断調査である Chinese Health and Retirement Longitudinal Survey (CHARLS) の 2011 年、2013 年、2015 年の個票を用いて、ファジーな不連続回帰デザイン (fuzzy Regression Discontinuity Design: RDD) 分析を行う。本研究の目的は、中国の都市部において、CHARLS の調査対象者の配偶者の定年退職が、調査対象者本人の健康・生活習慣と社会的活動に与える影響について定量的な検証を行った上で、中国における法定退職年齢の引き上げをめぐる政策的な議論に資する科学的根拠を導出することである。本研究が得た結果から、配偶者の定年退職は、本人の中等度や高強度の身体活動については約 4-5 時間程度、1 週間当たりの他人との交流を通じて楽しむ社会的活動への参加回数については約 0.5 回、そして 1 週間当たりの他人を支援する目的で行う社会的活動への参加については約 0.3-0.4 回程度、促進させ、正の世帯内波及効果のあることがわかった。他方で、配偶者の定年退職は、本人の喫煙については統計学的に有意な効果は観察されなかったものの、1 カ月当たりの飲酒回数を約 0.5-0.6 回程度増加させる効果があることがわかった。但し、本研究では、アルコール摂取量に対する情報がないため、当該効果が負の世帯内波及効果のあるかどうかについては判別が出来ない。無論、本研究から得られた結果からだけでは、「法定退職年齢の引き上げ」の是非を議論することは出来ないが、中国社会は、急速な人口の少子高齢化に直面している諸外国の政策に倣い、例えば、高齢者向けスポーツセンターなどの施設の整備や、高齢者向けの多様な地域コミュニティ活動を促進させることによって、たとえ法定退職年齢の引き上げにより、退職が遅延することになったとしても、中高齢の夫婦がともに働きながら、身体活動や社会的活動を抑制されることのないような社会の仕組みづくりの検討を開始する必要があるだろう。